

地虫鳴く昭和支へし炭坑に

伊藤 武敏

昭和を支えた炭坑という言葉に、太平洋戦争が終わった後の日本経済の歴史があります。文明開化の明治初頭、日本の石炭産地は、九州の筑豊、三池、長崎、本州の宇部、常磐、北海道の白糠、茅沼、幌内、夕張などでした。太平洋戦争に突入する一九四一年、五六四七万トンの生産量が日本の産炭史上最大の記録です。第二次世界大戦敗戦後、石炭の生産量は二二三〇万トンまで低下し、一九五一年に四六五〇万トンに回復しました。その後、エネルギー利用が世界規模で変化して、石炭から重油へ燃料転換が進みました。国内炭生産の縮小方針によって炭鉱は漸次閉山され、現在は北海道の坑内掘り一鉱、露天掘り数鉱があり、生産量は一二〇万トン程度です。このような変遷の石炭鉱業には多くの犠牲者があつてのことと記憶にとどめることが重要です。「地虫鳴く」の季語が炭坑の来し方への感慨を誘起します。

どんぐりに追ひ越されたる坂の道

中島 冬子

きつい坂道を降りるときは、足もとに一段と注意をはらいます。

そんな足もとにどんぐりが落ちたと思うとたちまち転がって追い越してしまいました。いつかどこかで経験した光景を、この句は思い起こさせます。見逃さずに詠み止めた作者の感覚の緻密な優しさが共感を呼びます。

さらさらと升をあふるる今年米

高橋キセ子★ハシゴ高

収穫の喜びに満ちた光景が手触りとして伝わります。米の銘柄は何年増えて、はえぬき、つや姫、こしひかり、ななつぼし、ひとめぼれ、青天の霹靂などとさまざまな品種の新米が出回ります。日常では升にあふれるほどの米を扱うことはなくなりましたが、二合ほどの新米でも丁寧に研いで炊くときの香に幸せな気分を味わう季節感です。米の味で最近の「日経ビジネス」の記事に興味を持ちました。日本炊飯協会が実施した食味検査の結果、アメリカ合衆国を代表するコメのカルローズと、山形産のササニシキ、はえぬきの三種類を炊いて、酢飯にして味を比べたというのです。総合評価でササニシキに軍配が挙がり、カルローズとはえぬきに有意差はなかったという結果でした。日本穀物検定協会が毎年実施している米の食味検査にも関心があります。日本中の産地が米の味を競い合います。しかし、あまり外国の米との比較が行われていないので、外国の米の記事を読むと「米国のコメ」という表現があり、この表記も不思議

議な気分で読みます。そのような雑念を忘れる新米の手触りは、ご飯の湯気の香まで届けてくれました。

身に入むや犇めき祀る陶狐

森 すゞ子

東京の秋葉原に近い柳森神社は狸の神社で知られています。幸神社が柳森神社と合祀されていて、こちらは稲荷社で、狸と狐と両方の御利益があります。稲荷社の陶製の狐が俗世の願望を犇めかせているのです。まさに「身に入む」光景です。

十あれば十の音色にひよんの笛

羽鳥 正子

競争社会の中では、同じような目標に向かって競争することによって個性が失われていくという問題が心配されます。生き方や目的に多様性を大切にする考え方を忘れてはならないと思います。ひよんの実はそれぞれ異なる形をしているし、それぞれ違う音を出します。笛として吹く人によっても音が違います。「みんなちがってみんないい」と金子みすゞが「わたしと小鳥とすずと」の詩の中に詠んだ言葉に呼応する一句です。

翡翠の朝の声あり伊豆の宿

城島 千鶴

翡翠は川蟬とも書きます。カワセミ、ショウビン、ヤマセミなどを含むカワセミ科の鳥の総称です。雀ほどの大きさで、背や尾が美しい青色で、その他は暗緑色、足は紅という色合いが見事な鳥です。川辺に棲んで水中の小魚をとって食べます。その羽の色から宝石の「ヒスイ」の名が付いています。伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク吟行の折、御宿しんしまで伊勢海老と鮑に舌鼓を打ちましたが、宿の通用門を出たところに川に沿う道があり、その道の対岸が翡翠の住処になっていました。その翡翠の声を聞き止め、「朝の声」と言い切ったことで、作者の感動が具体的でしっかり伝わります。

キリマンジャロその裾野なる翳雲

大石 高典

キリマンジャロ（標高五八九五メートル）は、アフリカ大陸の最高峰で、スワヒリ語で「白く輝く山」という意味であろうといわれます。タンザニア北東部にあり、山城がキリマンジャロ国立公園に指定されています。他の大陸の最高峰は大山脈にありますが、この山は山脈に属さない独立峰として世界で最も高いのが特徴です。山頂を浮かべるようにさまざまな雲が棚引くことが多く、今裾野を翳雲が包み込んでいる情景がこの句から想像されます。

氷室集

木の実置く掌は百歳の温みにて

東 俊子

百歳の、長い歳月の皺が刻まれた掌に木の実を載せた一瞬の感触を詠みとめました。百歳の元気な掌の温もりがリアルで、しかも「木の実」の季語が活かされた一句です。二〇一八年九月現在、日本全国の百歳以上の高齢者は、前年比二〇一四人増え、六万九七八五人になりました。四八年連続で最多を更新したことになります。女性が六万一千四百四人で、全体の八八・一パーセントを占めています。国内最高齢は、福岡市の田中カ子（かね）さんで一一五歳です。男性では北海道足寄町の野中正造（まさぞう）さんで一一三歳で、ギネスワールドレコード社が野中さんを世界最高齢の男性と認定しました。

黒猫が前肢縮め十三夜

三原真紀子

この黒猫は作者の家の猫でしょう。その猫が前肢を揃えてちよんと座っている、人間ならば正座している姿です。いつものような姿ながら、月を見ている、しかも十三夜の月です。この「十三夜」の季語で一句が成立したという良さを発揮した句です。日本の習慣は満月を鑑賞した人は同じ場所で「後の月」を見るということになっています。したがって月見は自宅するのが昔の習慣なのです。そんなことも思い出させる十三夜の季語と黒猫の姿です。

●ただいまと母に戻る天高し

河村 純子

能舞台を守って忙しく活躍する作者は出張も多く、留守がちになるでしょう。久しぶりに帰宅して、いつも通り「ただいま」と言った瞬間から日常が戻り、家族が登場する平常への感動が込められています。

父逝きし霎時施候に

山本 京子

「霎時施」は「こさめときどきふる」と読みます。七十二候の一つで、二十四節気の「霜降」の次候にあたります。一〇月二八日から十一月一日ごろに相当しており晩秋です。言葉としては、小雨がしとしと降るといった意味です。「霜降」の初候は「霜始降」、末候は「楓蔦黄」です。霎時施は「略本暦」における呼び名で、中国の宣明暦では「草木黄落」にあたり、その時期が巡ってくると父上のご逝去の時を思い出すのでしょうか。思い出は個人的は感傷に溢れ、一句が甘くなるところを、上手な季語の扱いで佳句になりました。

鴨川に白き朝来て白き息

小畠 和

鴨川の朝を白き朝と詠み、京都が底冷えの季節を迎える前の気象状況を色で表現されました。この冷え込みで京都盆地の紅葉が進み一段ときれいな紅となります。

紙飛行機追ふ少年や鰯雲

栗本 一代

さまざまな形に折っては紙飛行機を飛ばしてみても、その飛び方を観察しながら次への工夫をします。野外の風に乗る時、屋内の空気感に乗る時、それぞれの状況に合わせて滞空時間の長い折り方を工夫することは私も少年時代に熱中したことの一つです。鰯雲の浮かぶ空の下、風がなくてゆったりと飛ぶ紙飛行機を追いかけていく少年の真剣な顔つきが見える句です。

八瀬の地の切子燈籠揺らぎゆく

栗本 徳子

八瀬赦免地踊は一〇月の体育の日（祝日）の前日に行われます。京都市登録無形民俗文化財で、洛北の奇祭、あるいは灯籠まつりとも呼ばれています。透彫りの見事な「切子燈籠」、女装するのは一三歳から一四歳の男子中学生で、警固役は二〇歳の切子燈籠を経験した男子が支えます。後醍醐天皇の比叡山潜幸に尽力した功によって、代々地租所役免除の倫旨を与えられていた八瀬です。宝永四年

(一七〇七年)八瀬村と比叡山との争いの際は、秋元但馬守の裁断で救われました。この恩に感謝して秋元神社が建立され、踊りを奉納したのが由来と伝えられています。

台風が過ぎしころなり夕御飯

鈴木 春菜

台風が来る予報で、停電などに備え早めにご飯を炊いたりするところがありますが、台風が通り過ぎたとわかった途端に空腹を感じます。それならとさっそく夕御飯になるのです。そんな日本列島の台風時の生活をそのまま詠んで詩となっています。

コスモスやビオラ抱へて少女来る

佐々木 成

カタカナのコスモスとビオラの組み合わせが新鮮です。オーケストラの中ではビオラは地味な存在です。しかし最近、室内楽やソロで活躍するビオラ奏者が増えて、ビオラが主役の演奏会やCDもあります。昔、バイオリンに挫折してビオラを手にしたというビオラ奏者の話を聞いたことが思い出されます。ビオラはバイオリンより音域が五度低くサイズが一回り大きいのが特徴ですから、少女の体格では重い荷物です。今井信子さんは、一九九二年、日本で「ヴィオラスペース」という珍しいビオラのための音楽祭を創設しました。